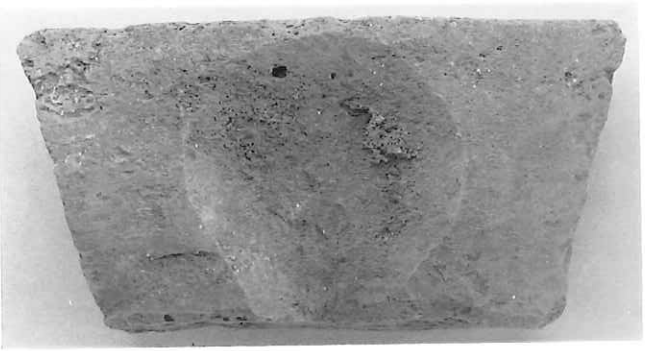
出石町史

第一巻

通史編上

出石神社

1　銅鏡　下安良Ⅱ号棺出土
町教育委員会蔵



2　石枕　下安良Ⅱ号棺出土 町教育委員会蔵

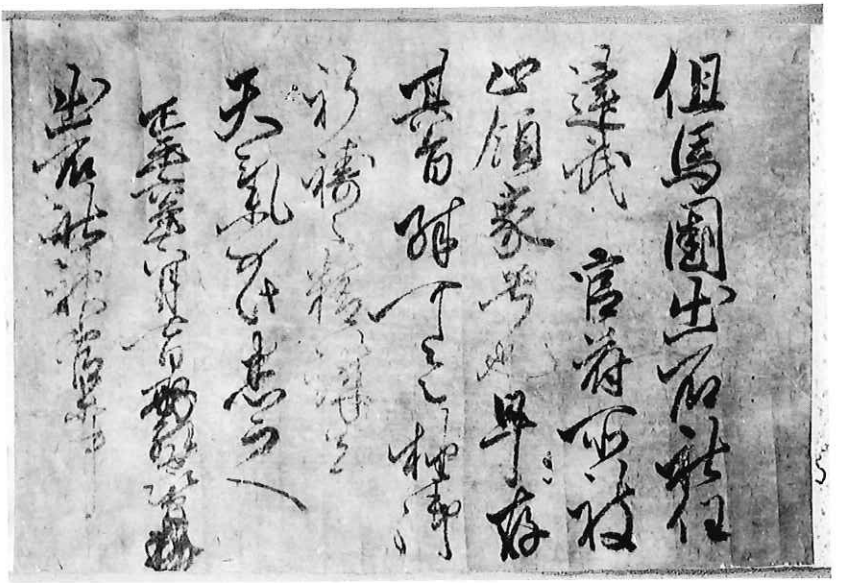
3　長持形石棺小口石　出土地不詳 町教育委員会蔵

4　出石大神宮古銅印　出石神社蔵

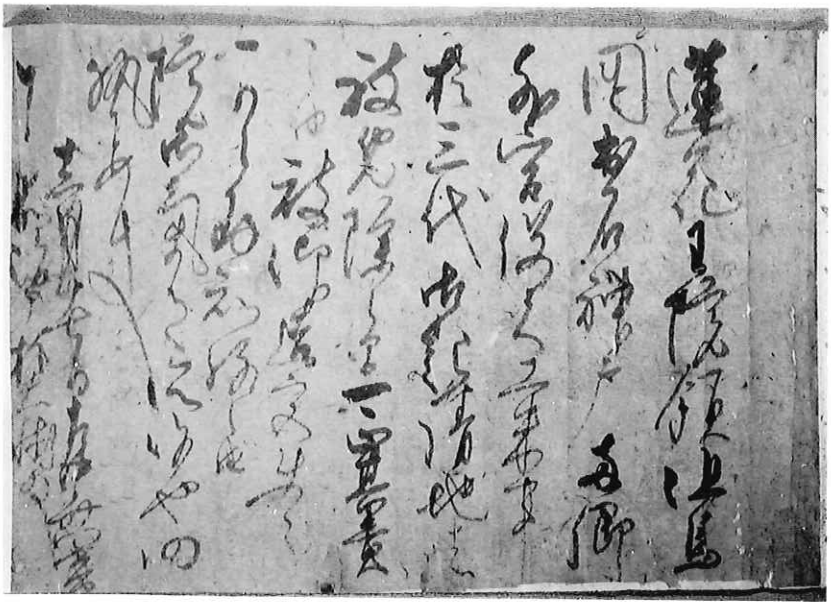
5　経筒　田多地経塚出土 町教育委員会蔵

6　地蔵菩薩立像　称名寺蔵

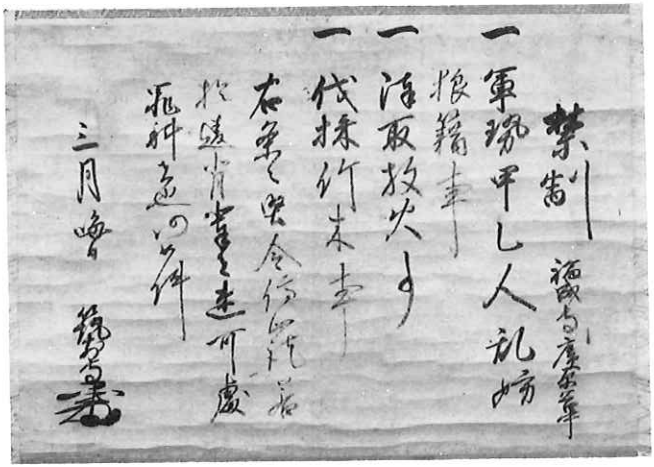
7　薬師如来座像　治承３年銘
袴狭区蔵



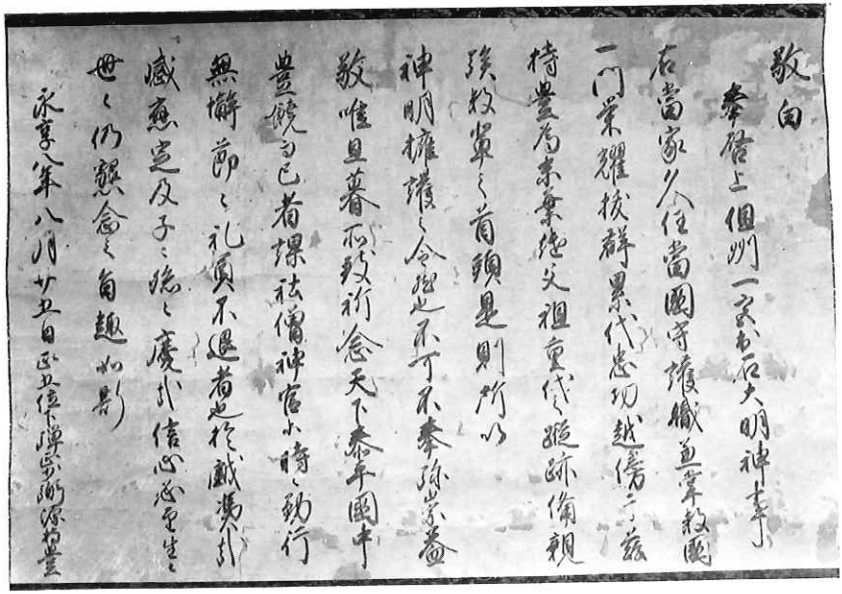
8　後村上天皇綸旨　正平6年8月7日 出石神社蔵



9　院宣　（年欠）12月27日　出石神社蔵



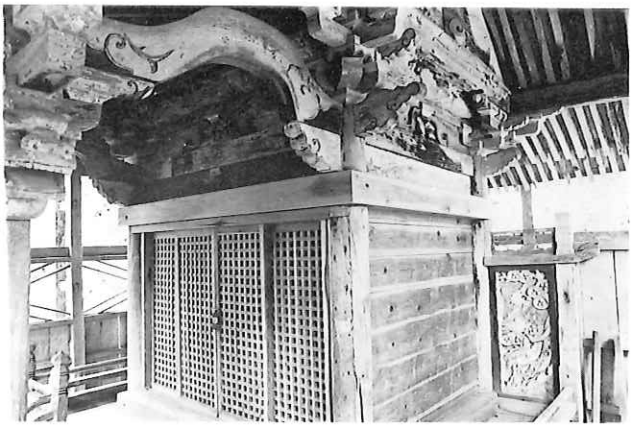
10　羽柴筑前守秀吉制札　（天正８年）３月晦日 福成寺蔵



11　山名持豊（宗全）の願文　永享８年８月25日 豊中市 神床守直氏蔵

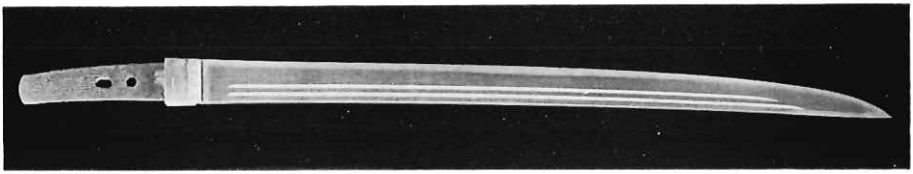
12　十一面千手観音立像　総持寺蔵

13　沢庵和尚自賛頂相　宗鏡寺蔵

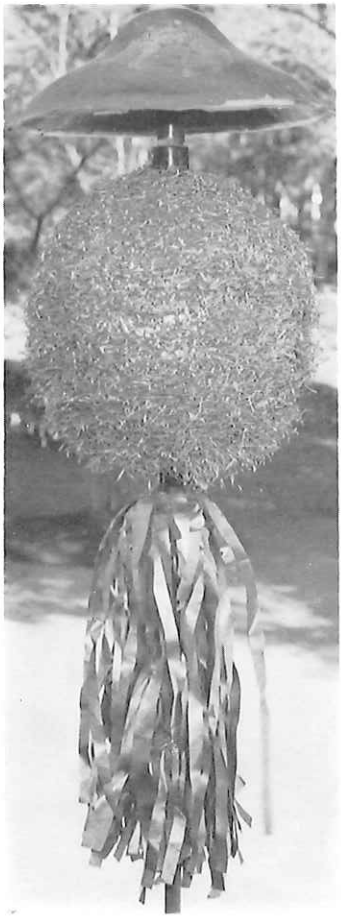


14　須義神社本殿

15　宗鏡寺開山堂



16　但州住国光作 脇差　出石神社蔵

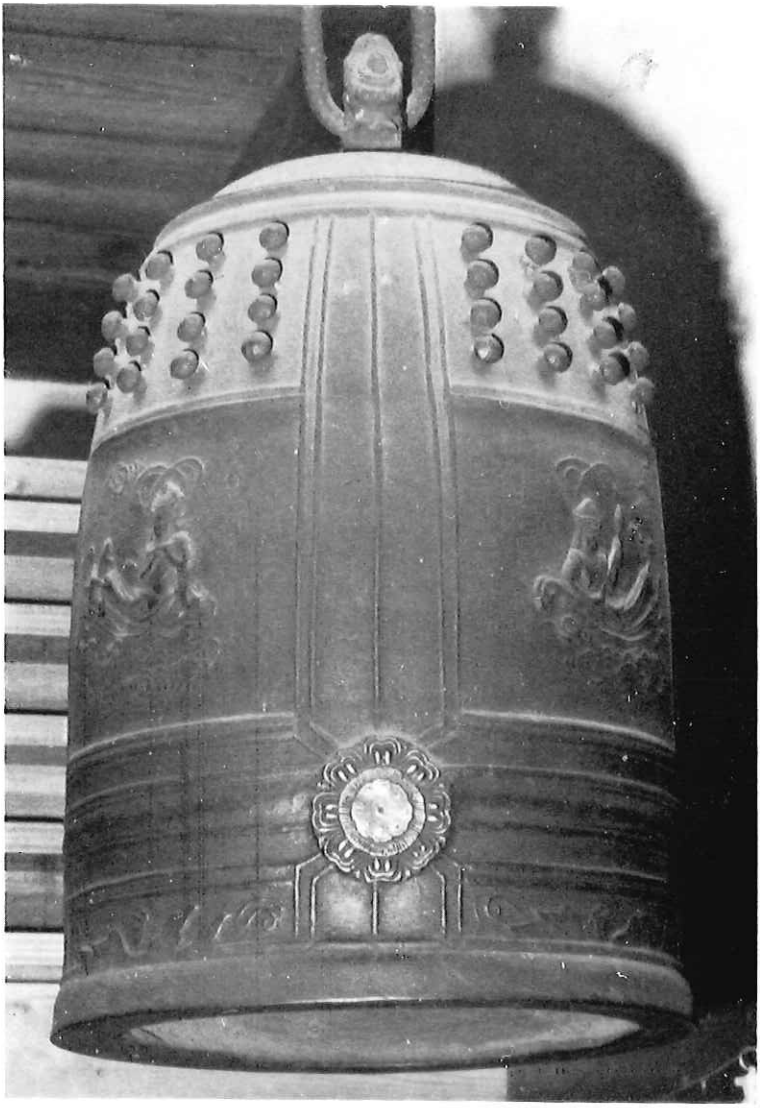


17　小出氏馬印　出石神社蔵

18　猿猴の甲冑　出石神社蔵

19　白磁茶碗と染め付け天目台
文化３年銘 京都府久美浜町 宝珠寺蔵

20　入佐山銘 流釉大皿 （土焼き）



21　沢庵和尚夢見の鐘　長享2年銘 宗鏡寺蔵

22　経王寺鐘楼

23　見性寺鐘楼

24　旧家老屋敷長屋門　国有

序

出石町は古い歴史と山紫水明の美しい自然に恵まれ、今なお、そのたたずまいの中そこかしこに昔日の面影を残しています。

そのなかにあって、古きよきものと新しいものとの調和を図りながら、まさに「情緒と文化の息づく、豊かで住みよい活力ある町」をめざし、町づくりへの努力が重ねられています。

町村合併による新生出石町の誕生二十周年の記念事業として、昭和五十二年以来取り組んでまいりました『出石町史』は、このたび第一巻「通史編上」を発刊することになりました。

広範な史料の収集から集成、執筆、厳密な校訂等、この編集にたずさわっていただいた先生方の並々ならぬご労苦や、熱意あるご尽力、町民各位のご理解とご協力に対し、深甚の敬意と感謝を申し上げますとともに、この発刊を共にお喜びしたいと存じます。

〃故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る〃 ということばがありますが、不透明な時代といわれ激変する時流の中では、ともすれば私達は自分の生きていく基盤を

見失いがちになります。この時にあたって、出石町の歴史を知り、今日の郷土を築いてきた先人の足跡をさぐり、その努力の結晶にふれることは、明日のより豊かな人づくり、町づくりをすすめていくうえでの要諦（ようてい）であると信じます。全四巻を予定する『出石町史』が町民各位に親しまれ、史実への新たな感銘が、この町に生まれ育った喜びとなり、人々の心の結びつきとなって、町勢振興のよすがとなれば、私の望外の喜びとするところです。

昭和五十九年三月

出石町長　升田賢一

凡例

一、『出石町史』は、通史編上・下、資料編Ⅰ・Ⅱの四巻よりなる予定であるが、この巻は第一巻として、自然環境並びに、原始から近世までの通史を収める。

一、本文の記述は、原則として常用漢字、現代かなづかいによった。ただし、固有名詞や特殊な用語については、これによっていないこともある。

一、読みにくい漢字には、できるだけ初出のところで、ふりがなを付けるようにつとめた。

一、数字は、原則として固有名詞以外は、一、二、三……九、一〇を使用し、単位を表す十、百、千は使用していない。ただし、万単位以上はこれを使用した。

一、年紀の表記は西暦により、日本年号は（　）内に付記した。ただし、同一節内で頻出する場合は省略したものもある。

一、人名は、原則として敬称を省略した。

一、本文記述のなかには、学界諸家の研究成果を採用した個所があるが、本書の性質上、特別の場合以外は、その氏名、出典を示さなかった。

一、写真・図・表は、それぞれ一連番号を付した。また巻末に写真・図・表の一覧表を添えた。

背文字および扉文字は出石町長升田賢一筆。

出石町史　第一巻　目次

はじめに……一

第一章　出石の自然環境

この章のあらまし……一〇

第一節　宇宙時代の地球観……一三

宇宙的視点に立って　地球の歴史

第二節　近畿北部および出石の地史……一五

1　第四紀地殻変動（ネオテクトニックス）……一五

2　古生代～中生代中期の地史

3　中生代末期～新生代古第三紀の地史

4　新生代新第三紀の地史

まえがき　高柳累層の時代（約二〇〇〇万年前）　八鹿累層の時代（約一八〇〇万年前）

豊岡累層の時代（約一五〇〇万年前）　村岡網野累層の時代（約一三〇〇万年前）　丹後累層の時代（約一〇〇〇万年前）　照来層群の時代（約一〇〇〇万～四〇〇万年前）
5　段丘相当層の地史（約六〇～二〇万年前）
宮内礫層　福知山累層
6　海成沖積層の地史（約三万年前～現在まで）
第三節　出石の気候……三四
日本の気候区分　地形による気象の特徴　四季の気象
第四節　出石の生物……四三
地形的・地質的景観　気象的環境　出石町の植生　町内から失われた生物　失われたと推定される生物　今後保護すべき生物
第二章　考古学からみた出石
この章のあらまし……七三

第一節　原始時代の出石……五四
人類の発生　出石町住民第一号は縄文人か　旧石器時代　石器の編年と遺跡　縄文時代への胎動
第二節　縄文時代の出石……六八
縄文時代の但馬　縄文時代草創期　縄文時代の早期　縄文時代の前期　縄文時代の中期　縄文時代の後期　縄文海進による変化　出石町の縄文遺跡　縄文時代の終末
第三節　弥生時代の出石……八七
稲作農耕が花開く　弥生文化の波及　弥生時代中期　弥生時代後期　銅鐸から古墳出現へ
第四節　古墳に埋葬された人々……一〇七
稲作文化の到達点　出石の古墳　但馬の古墳　最古の古墳　竪穴式から横穴式石室へ　横穴式石室の時代　横穴　在地型の墓制　木棺直葬墓　組み合わせ式箱形石棺　銅鏡を持つ古墳　石枕　石棺の石材　土師器　須恵器　古墳時代から新しい時代へ

第三章　古代の出石

この章のあらまし……一三四

第一節　天日槍伝説……一三六

天日槍伝説と出石　天日槍伝説のあらまし　天日槍伝説の本質　ホコの呪力について　出石の神宝　出石乙女　清彦の神宝奉献　田道間守の常世行き　天日槍にまつわる神社

第二節　但馬と天皇家……一五七

但馬国造の成立　皇妃と王子　名代・子代の部

第三節　律令制下の但馬……一六五

大化改新と律令政治へのあゆみ　但馬国は上国　出石郡は下郡　出石郡衙は出石郷に　出石郷　小坂郷　安美郷　室野郷　埴野郷　高橋郷と資母郷　地方政治の確立　第一次但馬国府　出石勢力の衰退　律令農民の暮らし　但馬国正税帳　奴婢の貢進　逃亡する奴婢　調と庸と雑徭　但馬の軍団　但馬軍団の幹部たち　条里制遺構　但馬の条里制遺構　出石地方の条里制遺構　古代の駅制　駅馬の数

第四節　揺らぐ律令制……二〇四
健児の制　不足する但馬の口分田　出石に来た国守たち　国司の苛政
太田荘の盗犯殺害人　人口と田積
第五節　古代の社寺……二一八
一宮の神階　出石大社の烏雀群集　出石大社の神宮寺　但馬の古仏像
伊福部古墳出土の灰壺石櫛　宗鏡寺にある但馬国分尼寺の礎石

第四章　中世の出石
この章のあらまし……二三〇
第一節　鎌倉時代の出石……二三三
1　源平争乱と但馬……二三三
但馬守平正盛　平氏政権下の但馬　経盛・経正父子　平家没官領と平家方人　平季広の失脚　源平争乱期の寺社の動き
2　但馬守護……二四六
惣追捕使小野時広　守護所源親長　承久の乱と太田昌明の入部　常陸

房昌明　承久の乱と昌明
3　但馬国太田文……二五四
『但馬国太田文』の注進　出石郡内の荘園公領　八幡宮領菅荘　菅荘の名田構成　弘原荘と大内荘　国領出石郷と地頭出石氏
4　但馬国守護所……二七〇
守護所　但馬の守護領
5　村落と農民……二七四
神戸郷絵図断欠

第二節　南北朝内乱期の出石……二八〇
1　南北朝内乱と但馬の諸氏……二八〇
元弘の乱と但馬の武士　目まぐるしく変わった但馬守護　今川頼貞の但馬経営　但馬の南朝軍蜂起　観応の擾乱と但馬　師直と直義の対立
2　山名時氏・師義……二九〇
山名時氏の動き　時氏、但馬守護を僭称　山名師義、但馬守護となる
明徳の乱

第三節　室町時代の出石……三〇〇
1　山名時凞……三〇〇

時熙、但馬守護となる　応永の乱と山名氏再興　山名持豊の登場　持熙、持豊兄弟の家督争い
2　山名持豊……三〇九
美作守護職をめぐって　赤松残党との戦い　赤松氏再興と山名氏の対応
宗全と勝元　応仁の乱の勃発　両雄の死
3　山名政豊……三三四
山名政豊の降参　政豊の幕府出仕　政豊の播磨侵入　山名俊豊の活躍
蔭木城の敗戦と垣屋一族の戦死　但馬の内紛　政豊の死

第四節　戦国時代の出石……三四三
1　山名致豊・誠豊……三四三
致豊の継職　但馬の内戦　致豊、誠豊に家督を譲る　誠豊の播磨進攻
書写山の敗戦　誠豊、丹波に出兵す　山名誠豊の死
2　山名祐豊・氏政……三五三
祐豊の西進政策　祐豊、叙位官途す　祐豊の外交政策　生野銀山の発掘　織田信長上洛以後の但馬　此隅山城落城し祐豊堺に出奔　但馬の内紛続く　此隅山城から有子山城へ　有子山城の築城　山名・毛利両氏の和議　羽柴秀吉の南但制圧　山名氏の滅亡

第五節　中世の文化……三六九
総持寺の歴史　出石神社の焼失と再興　出石神社の神職たち　総持寺本尊の造立　奉加した人々　人々の願い　歌枕、入佐の山　宗砌と行助　宗砌流

第五章　近世の出石
この章のあらまし……三九〇

第一節　近世前期の出石……三九二
1　小出家の治世……三九二
前野但馬守長康のこと　小出吉政の入部　小出吉英の再封　四分家の創設　領内の支配組織　商人資本の農村進出と藩札の始まり　小出家の断絶　断絶時の騒擾　幕府代官出石城を預かる　出石下郡減免嘆願書　嘆願書の史料的価値　松平忠徳の入部
2　貢納制度の確立と寄生地主制の成立……四二三
但馬の太閤検地　元和の検地　寛永～正保の検地　承応の手直し検地
分付けの意義　分付け主は質入れ主　激しい土地異動　村役人層の交

代　地主手作経営の行き詰まり　寄生地主制の成立　散田の意義
年貢賦課率決定の手続き　高い小作料　曲尺相固定化の経過　夫米・口米・小物成

第二節　近世中期の出石 …… 四七

1　仙石出石藩の動静 …… 四七
松平忠徳・仙石政明と領知交代　政房、政明の養子に決定　仙石家家臣の人数　家老陣と馬廻り・小姓組　上げ米に頼る藩財政　仙石政辰の治世　治世が短い久行　久美浜領内一揆鎮圧に出動　二番手の出動
一番手の逮捕活動　遊猟を楽しむ仙石久道　海岸防備令と朝鮮人漂着
地方知行制の復活　知行付き百姓と手当て方百姓の人選と負担　御城付き・御供所村の指定　地方知行制の持続

2　城下町出石の発展 …… 五三〇
出石城の縄張り　侍町と社寺　城下町とおもな職種　作事関係諸職人
鋳物師と鍋屋　紺屋　激しい経済変動に苦しむ藩財政　多額の御用銀
賦課　享保年中勝手方覚書　返済延期に抵抗する商人・大庄屋　銀札
発行の再開　米の流通と御用商人　酒屋へ流れこむ年貢米　幕府の酒造統制　酒造の町であった出石　町分の形成　高かった町分の租率

3　下郷の苦悩 …… 五六九

大庄屋組　下郷の景観　年中行事　農事暦＝年間農作業　稲・麦・麻・綿の栽培　牛と農具　『仙石家譜』　水害の記録　下郷の苦悩、冠水による稲の被害　検見手続き　無田・無脇、皆無検分願い　預け口・契約小作料・収穫高の関係　減免交渉により小作人作得は約二割　小作人層の食生活　両極分解を示す農民層の分解　町方地主の後退と地主の得分

4　明和の一揆 ……六三三

一〇か村の庄屋、一揆を発起　組頭クラスによる一揆実行会議　一〇月一九日に決起　大庄屋、一揆勢と交渉　救米給付と一揆収拾協力者に褒賞　一揆参加者の処罰　明和一揆の性格　天明の飢饉

5　村方行政のしくみと山論 ……六六〇

村のしくみ　人口・戸数の変遷　信仰生活の一端、参宮と順礼　柴札と町方の入会権　袴狭村と里村六か村との山論　上野・日野辺・桐野三か村の山論　百合谷をめぐる山論　斧・なたの使用をめぐって山論　細見村と長砂・鳥居両村との山論

第三節　近世出石の文化 ……六八六

1　宗教 ……六八六

沢庵和尚の生いたち　大徳寺出世と投渕軒時代　大徳・妙心寺法度と沢

庵の配流　沢庵の赦免と家光の厚遇　投渕山居の夢　本末関係と寺檀制度　遊行上人の巡行　出石の寺社と著名僧

2　教育 ……七〇七

藩校弘道館の創立　弘道館の授業と運営　私塾　心学　寺子屋

3　学問 ……七一六

儒学・漢学　国文学・歌・俳諧　洋学　その他の諸学

4　美術・工芸・芸能 ……七三五

出石焼の土ものの創始　磁器の創始　藩窯の開設と民間委託　民間諸窯の興隆　諸窯作品の概観　その他の美術工芸　茶・花道ほか

第四節　近世後期の出石 ……七四一

1　文政の改革と仙石騒動 ……七四一

寛政ごろはまだ余裕があった藩財政　大老となる家筋　文政初年に六万両の借金　不換紙幣の発行と産物会所の創設　仙石左京大老就任　仙石左京、財政再建のための新政策発令　諸商人問屋ならびに株持ち編成令　魚市場領内強制誘致令　産物会所仕法　諸役所経費の節約体制　改革のつまずき　仙石左京の退陣　仙石造酒の復古体制　産物会所機能の停止　産物札発行停止、正銀札に統一　銀札相場の下落始まる　同役の感情がもつれ造酒政権崩壊　左京再登場、主計札場立て直し策継続

年貢直渡しの融資組挫折し主計失脚　面扶持始まる　再び活性化する左京路線　凶年の減免拒否に農民一揆起こる　軽い処分の理由と面扶持の経過　文化末～文政期の歳出の変遷　仙石騒動の発覚

2　減知後の出石藩政……八〇〇

上げ知村々決まる　不評の荒木玄蕃　酒匂清兵衛融資組織を編成　産物会所糸問屋再開　藩主、融資組織を拒否、家臣団に抗争再燃　第二次仙石騒動　全家中の家禄半減　義倉銭札始まる　銀札信用の動揺と産物会所の再々開　義倉銭札の停止　村替えを機に家禄加増　村替え成功の背景に海防問題　村割り知行復活と出動演習　西洋流砲術の導入と古流の反発　弥太郎、堀新九郎を告発し入牢　藩主、堀新九郎と暗闘　堀父子滅却、藩主の直裁実現　多田弥太郎、勤王運動に身を投じる

3　町方の暮らし……八五三

出石藩の『御用部屋日記』　出石城下町の概要　お触れのいろいろ　藩の民生福祉行政　商いと物価　城下の治安と犯罪　出石犯科帳と新撰組の来藩　御褒美成し下さる　神社と祭礼　娯楽と年中行事　たび重なる災害　領民歓楽と忘憂の地楽々園　時鐘から辰鼓へ

写真・表・図一覧……巻末

付図　出石城下町絵図……別箱入

はじめに

出石町は山紫水明の地である。南には東西床尾（とこのお）の険しい山並みを負い、北には法沢（ほうたく）、東には古寺（ふるでら）のややなだらかな連峰を擁している。西はゆるい丘陵地で、その中央部が豊かな出石盆地である。

その源流を但東町久畑（くばた）に発する出石川は、『古事記』の美しいロマンを秘めて、東から盆地の中央部を貫流し、太田川・佐々木川・河本川・奥矢根川・畑川・奥山川・谷山川・菅川などの各支流の清らかな水を集めて北流し、豊岡市伏（ふし）で円山川と合流して日本海に注ぐ。

わたくしたちの郷土、出石町は兵庫県の北東部に位置する。北は豊岡市、東は但東町と京都府熊野郡久美浜町、西は日高町と八鹿町、南は養父町と和田山町にそれぞれ境を接している。

町役場の所在地は、北緯三五度二八分、東経一三四度五二分である。

町域は東西に一一・〇キロメートル、南北には一四・二キロメートルの広がりをもって

いる。面積は八九・七九平方キロメートル、但馬一市一八町のうちの第一五位であるから、決して大きな町ではない。

一九八〇年（昭和五五）一〇月一日に実施された第一三回国勢調査によれば、在住世帯数は二八三九戸を数え、人口は一万一一二九人（内訳男五三九九人、女五七三〇人）で、人口密度は一平方キロメートル当たり一二三・九人となり、但馬で第七位を占める。

世帯数および人口の推移をみれば、一九五七年（昭和三二）に三一〇五世帯、一万五四二六人あったが、年を追うにつれて減少し、とくに経済の高度成長が叫ばれた一九六〇年（昭和三五）国勢調査では四六九世帯、二八六九人が流出している。これは、町村合併後、神美の穴美谷地区が、豊岡市に境界変更したための大量減である。その後は一九六五年（昭和四〇）に世帯数四七、人口二八六人減をピークとして、多少の波がありながら減少傾向は鈍化し、一九七七年（昭和五二）には世帯数一四、人口ではわずか一人だけだが増加したのを転機として、七八年（昭和五三）には三〇世帯、二五人、七九年（昭和五四）には二七世帯、九四人、八〇年（昭和五五）には二七世帯、九九人増となり、少しずつではあるが増加するようになってきた。一世帯当たり人口は六〇年（昭和三五）に四・八一人、六五年（昭和四〇）に四・四八人、七〇年（昭和四五）に四・二二人、七五年（昭和五〇）に四・〇一人と核家族化傾向のとおりに減少し、八〇年（昭和五五）にはついに四人を割って三・九二人となった。核家族化現象は出産率の低下にも原因があり、全国的な動向としてやむを得ないが、過疎

現象がおさまってわずかずつながら世帯数・人口が増加するようになってきたことは、二〇年来の過疎に悩んできた出石町としてはたいへん明るい話題である。

この『出石町史』は、わたくしたちのふるさと出石町を、さらにいっそう愛していただくようにとの願いをこめて書きあげられている。

わたくしたちの出石町は、但馬国出石郡の首邑である。明治以前は、但馬一国の首邑であった。

古代では、但馬の一宮として一国の尊崇を集めた出石神社にまつられる天日槍が、出石地方を根拠地として国作りをしたという古い伝承が語られる。この伝承を裏付けるのが一九一二年（大正元）に豊岡市気比字鷲崎の岩窟内から出土した四口の銅鐸（気比鐸）である。銅鐸が何に使用されたのかはまだ分からないことが多いが、現在までのところ、但馬から出土した銅鐸は、この気比鐸のほかには、故意に粉砕された久田谷鐸（日高町久田谷出土）があるだけで、しかも一口ずつ出土することの多い銅鐸が、四口もまとめて埋納されていたということは、この地方に但馬最大の勢力者が住んでいたことを物語るものであるといってよい。

つぎに豊岡市森尾字市尾の森尾古墳がある。森尾古墳は全国的にみても前期古墳の代表に数えられてきた古墳で、一墳丘三石室という珍しい構造をもち、方形墳であったらしい。とくに銅鏡三面が出土し、「□始元年陳是作……」の銘をもつ三角縁神獣鏡は、群馬県高

崎市柴崎町の蟹沢古墳や山口県新南陽市竹島の御家老屋敷古墳出土の鏡と同型で、とくに新たに確認された御家老屋敷古墳の鏡銘によって魏の正始元年（西暦二四〇年）に間違いないことがほぼ決定的となった。

さらに町教委事務局や本覚寺などに散在する長持形石棺材がある。この石棺が埋納されていた古墳がどこにあったのか分からないのだが、長持形石棺は大和・河内の天皇家、またはそれに近い人々が好んで用いたものであって、但馬では出石以外には一例もない。出石・豊岡地方には和田山町の池田古墳（全長一三〇メートル）や、朝来町の船之宮古墳（全長七六メートル）のような巨大な前方後円墳がないかわりに、その総数は約三〇〇〇基を超えるほど多い。逆に南但地方は巨大古墳があるのに群小古墳は少なく、北但地方とは明白な差があるのである。このことは、およそ古墳後期までは、依然として出石・豊岡地方が但馬でもっとも有勢な地域であったことを示していると思われる。

但馬国府は初め出石に置かれていた。国分寺も出石にあった。国分尼寺も出石にあったはずである。それが気多郡（今の日高町）に移されたのは、北但と南但というかなりきわだった二つのブロックに分かれていた円山川流域と、さらにこれとは独立的な矢田川・岸田川流域、つまり「国造本紀」のいう二方国をも併せて支配するための必要からであったが、出石地方に即していえば、出石郡は但馬の北東隅の一郡となって、しだいに振るわなくなっていった。

鎌倉時代の守護所の位置は、一般には国衙付近に置かれることが多いが、最近の研究では、但馬の守護所が円山川の下流域、出石・豊岡地区にあったらしいという。その根拠の一つは、「但馬国太田文」にみえる出石三郎信政が、守護太田氏と縁故関係で結ばれた太田一族らしいということにある。出石信政はたぶん出石神社の祭祀にも関係したかも分からない。あるいは古代の出石氏の系譜をひき、天日槍の末裔と称した伝統的な豪族ともどこかでつながっていたのであろう。

室町時代に山名氏が出石神社のすぐ北にある此隅山城を本拠と定めた理由も、おそらく出石・豊岡地方が但馬の守護領の中心であったという鎌倉時代の伝統をぬきにしては理解できない。

この伝統は近世の出石藩に引き継がれた。但馬には出石藩と豊岡藩の二藩があり、一八六九年（明治二）にはそれまで交代寄合の旗本家であった村岡の山名義済が一万一〇〇〇石の村岡藩として認められて三藩になった。豊岡藩京極家は一六六八年（寛文八）の入封当時は三万五〇〇〇石を領知していたが、陣屋しか認められず、出石城は但馬でただ一つの近世城郭だったのである。出石城下には、その町名にも八木・田結庄など山名時代の名残りが色濃く残っているし、藩校弘道館は多くの人材を輩出した。特産品出石焼はその真白い白磁の美しさで広く愛好され、丹後縮緬からその技術を学んだ出石縮緬も素晴らしい織物を織り出している。最近有名になった出石皿そばは、仙石氏が信州上田から出石に転封に

なってきたときに信州そばの技法を伝えたものといわれているが、今では出石の欠かせない名物のひとつになった。

沢庵和尚ゆかりの宗鏡寺には、沢庵が七年間を過ごした草庵投渕軒が復興され、沢庵の作庭と伝えられる見事な庭園も残っており、出石神社・総持寺・称名寺・経王寺・見性寺・福成寺・願成寺ほかの社寺にもそれぞれ貴重な文化財が伝えられている。城下町らしい雰囲気を溢れさせているのは、辰鼓楼と舟着場灯籠、および大名行列保存会によって守られている大名行列槍振りで、一九六八年（昭和四三）に復興された出石城跡の東西両隅櫓の美しい桃山様式の姿も、いかにも城下町出石らしい風景を演出してくれる。

もちろん長い歴史のなかで消え去ったものは多い。最近でも松畷のクロマツ並木、辰鼓楼横の甚兵衛松があり、絶滅しかかっているものにコウノトリがある。

わたくしたちは、わたくしたちの先祖がいとおしみ大切に伝え継いできた郷土の風土と歴史を、さらに豊かにしてわたくしたちの子孫に伝えてゆく義務と責任があると考える。

一九五七年（昭和三二）九月一日、旧出石町と旧室埴・小坂・神美（一部は豊岡市に編入）三か村が合併して、現在の出石町が誕生し、今年で二七年目を迎えた。

鉄道に恵まれぬ出石町は、もっぱら自動車輸送に依存しているが、国道九号線や中国自動車道とも遠く隔たっており、町域を走る道路は、国道四二六号、県道宮津―出石―八鹿線、出石―村岡線を幹線としている。交通・運輸事情の良否は、直ちに産業の盛衰につな

がる問題であり、明治以後、出石が但馬の首邑としての地位を失ったのもこのことに原因があった。交通・運輸網の整備・改良などは、その意味で今後の重要な課題であろう。

しかしながら、交通・運輸事情の悪さは、反面、わたくしたちの出石町を静かなたたずまいのままにそっと残してくれてきた。出石城跡に二基の隅櫓が復興したのを機に、出石町は観光に新生面を見出し、古い時代情緒を縦糸に、出石焼・出石縮緬・出石皿そばなどの特産品・名物を横糸にして、『但馬の史都・城下町出石』の古くて新しい顔を織りあげようとしている。農業基盤である圃場(ほじょう)整備事業も完了が近い。

歴史と田園の町、出石町は、未来へ向かって確かな羽ばたきを始めているのである。